

2021年2月28日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

詩編 139 : 1～24

ルカによる福音書 12 : 22～34

「思い悩むな」

<思い悩むな、神の国を求めよ>

「思い悩むな。」イエスさまは、ご自分の弟子たちに語りかけられます。イエスさまに従う者たち。そのゆえに、敵対する者や、多くの群衆に囲まれ、恐れている弟子たち、わたしたちに語りかけられます。「思い悩むな。」

わたしたちには、多くの思い悩みがあります。まさに今、その只中にある人にとっては、「思い悩むな」という御言葉は、そうしたいと切に願うことであり、縋りつきたいような御言葉であると思います。

わたしたちは思い悩まずにはられません。イエスさまは、命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな、と言われました。それは本当に貧しく、生きるための糧を思うことですが、それが与えられていたとしても、わたしたちの悩みは尽きません。生きるために、生きる中で、多くのことがわたしたちを悩ませます。金銭的なことはもちろん、仕事のこと、生活を共にする家族のこと、日々接する人間関係のこと、自分の体のこと、将来の心配、そして、信仰のこと…。

これまでもわたしたちは生きる中で、本当に多くのことに心を砕き、心配し、思い悩んできたのではないのでしょうか。

思い悩む、というギリシア語は、「心・思い」と「分かれる」という言葉で出来ています。色々なことを思って、心が千々に乱れること。あれやこれやを心配して、心の思いがあちこちに分かれてしまっていること。それが、「思い悩み」です。

イエスさまは、そのようにわたしたちが、心を乱して、生きることにあくせくしていることをよくご存じです。だからこそ今、イエスさまはご命令の言葉で、わたしたちに語りかけられるのです。「思い悩むな」。

そしてイエスさまは、千々に乱れた、あれやこれやの思い悩みで散らばっているわたしたちの心が、本当に向かうべき所を教えて下さいます。それは、31節です。「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」

あなたには多くの思い悩みがある。しかし、その中であっても、あなたはまず「神の国」を思い、求めなさい。神のご支配を求めなさい。神の救いを、神の子として生きることを、一番に求めなさい。これが、今日イエスさまがわたしたちに語って下さっていることです。

<思い悩むな>

さて、イエスさまは、その理由をととも丁寧に語って下さっています。なぜ、わたしたちが思い悩まなくてもよいのか。なぜ、わたしたちが一番に神の国を求めるべきなのか。

まず、イエスさまは、思い悩まなくてよい理由として、神さまが、あなたを鳥よりも、野の花よりも、大切に下さり、顧みて下さり、養って下さるのは当然ではないか、とお語りになります。

先週は、愚かな金持ちのたとえを聞きましたが、そこでは、わたしたちに命を与え、それを支え、また取り上げられるのは神さまであること。だから、この命の支配者である神さまが、わたしたちの命に必要なものも備え、生かし、養って下さるのであって、わたしたちは、自分で自分の命を支えることも、生かすことも出来ない、ということが語られていました。だから、自分の富や、能力や、力などに頼って、自分の命を養い生かそうとすることは「貪欲」である、とまで言われたのです。

また、神さまが命を支配する方であり、小さな命をも慈しんで養って下さる方であることは、12章の始めの方でも語られていました。そこでは、人間は体を殺すことが出来るだけで、その死んだ後の命も支配し、あらゆる権威を持っておられるのは神さまであること。そして、そのような命に対する力と権威を持っておられる神さまは、一羽の雀もお忘れになることのない方である。あなたの髪の毛一本も数えるほどに、あなたを見つめ、あなたを顧みて下さる方である、と語られていたのです。

そして今日もイエスさまは、命を支配なさる神さまが、どのようなお方かを語られます。

今日出て来るのは、雀ではなく鳥（カラス）です。雀は、前回、五羽セットでなければ値段が着けられないような、あまり価値がないとされている鳥であるとお話をしました。実は鳥は、その雀よりも価値がありません。旧約聖書では汚らわしい鳥としてリストに挙げられているのです。価値がないどころか、忌み嫌われ、避けられるような存在の鳥。その鳥でさえ、神さまは目を留め、大切に養われるお方だ、というのです。

そして、明日には邪魔だと言って、抜かれて、ポイツと炉に投げ入れられ、燃やされてしまう野の花。その花でさえ、神さまは目を留め、雨を降らせ、栄養を与えて成長させ、栄華を極めたソロモン以上に美しく着飾らせ、装われるお方だ、というのです。

そんな神さまが、ましてやあなたを、目に留めないはずがない。ましてやあなたを、養って下さらないはずがない。あなたを慈しみ、顧み、守って下さらないはずがない。だから、思い悩むな。イエスさまはそう語られるのです。

<信仰の薄い者たちよ>

でも実はイエスさまは、これまでもずっと、神さまがどのような方であるかを、神さまが人を憐れみ、愛し、救って下さる方であることを、弟子たちに語ってこられました。

イエスさまは神の御子であり、神さまの救いをわたしたちに与えるために、遣わされたお

方です。そのイエスさまは語ってこられたのです。神の国が来た。わたしが神の救いを実現する。そして今ここに、わたしはあなたがたと共にいる。だから、あなたたちは幸いだ。御言葉を聞きなさい。わたしの救いを、神の愛を、受け入れなさい。恐れることはないのだと。

そして弟子たちは、またわたしたちは、この恵みの御言葉を聞いてきたのです。そして、信じ、従ったはずなのです。

それなのに。心にはすぐに疑いが、不安が芽生えてくるのです。目の前の思い悩みに、心が散り散りになるのです。人の目を恐れ、生活に思い悩むのです。そして、このあたたかい、慈しみに満ちた眼差しが、片時も離れず永遠に注がれていることを、忘れてしまうのです。

だから、イエスさまはわたしたちを戒められます。

「信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。」

信仰が薄い。それは、わたしたちが、神さまに小さくしか信頼していない、十分な信頼を置いていない、ということです。神さまを信じている、頼っていると言いながら、片手で神さまの手に掴まって、まだもう片方の手を千切れかけのロープから離さないのです。結局それは、神さまを信じていないのです。

わたしたちが手放そうとしない自分の手の中のもの、実際、何の役にも立ちません。もう、神さまは両腕でわたしを抱き取って下さっているのだから。御手の内に救い取って下さっているのだから。わたしたちは役に立たないものを手放して、両手で、両腕で、神さまに身を委ねて抱き着けば良いのです。

あなたを愛しておられる、あなたがたの父なる神さまを、もっともっと信頼しなさい。イエスさまは、そう語って下さっているのです。

イエスさまは、人が自分自身に頼って、何を食べようか、何を飲もうかと考え、悩むことは、世の異邦人が切に求めているものだ、と言われました。世の異邦人とは、この命の支配者である神さまを知らない人々のことです。自分の命を養って下さる方を知らない。自分を慈しみ、愛し、救うために心を砕いて下さる神がいることを知らないのです。だから、自分で自分を養うために、自分で自分を守るために、必死にならなければならないのです。競争し、勝ち抜き、生き残らなければならないのです。負けて、脱落したら終わりなのです。

しかし、あなたがたは、神を知っている。鳥をも養い、野の花をも着飾らせる方を知っている。あなたを愛し、あなたをご自分の子供として受け入れ、すべての恵みを受け継がせようとして下さる、あなたがたの父なる神を知っているではないか。だから、思い悩むな、と言われるのです。

そして、だからこそ、命のことや、体のことを求めるのではなくて、まず、あなたは、神の国を一番に求めなさい、と言われるのです。

<神の国を求めなさい>

「神の国を求めなさい。」それは、心に願う一番のことが、今日一日の中で、一番多く心に思うことが、「神の国」であるということです。神の国を、心の真ん中に置くということです。神の国とは、神さまのご支配の下で生きること。神さまの救いに与り、神さまと共に生きることです。そのことをまず、一番に願い求めるのです。それだけが、求めるべきことなのです。そして、求めれば、与えられるのです。

わたしたちは、この神の国を求め続ける中で、神さまとの親しい関係に生き続ける中で、必要なことをすべてご存知である、わたしたちの父なる神さまが、食べものも、着るものも、必要なものは、救いと共に、恵みの内に、すべて加えて与えて下さると信じ、思い悩みを神さまの御許に預けて、恐れずに歩んで行くことが出来るのです。

<小さな群れよ、恐れるな>

32節で、イエスさまはこう言われました。

「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」

神の国を求める者には、「あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」、という確かな約束が与えられています。

イエスさまは何度も、創造主である、万物の支配者である神さまを、「あなたがたの父」と言って下さいます。

そして、父は喜んで神の国を下さる。喜んであなたがたを救って下さる。あなたがたをご自分の子どもとし、恵みを与えることを、父なる神さまは望んでおられ、またそれを喜びとしておられるのだ、というのです。

この箇所は、口語訳聖書では「御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」と訳されていました。御国を下さることは、わたしたちを救い、恵みのご支配に生かして下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。そうしたいと望んでおられ、それを実現することを喜びとされているのだ、というのです。

そして、それが本当であることを、神さまの愛する独り子であるイエスさまが、ご自分の十字架と復活の御業によって示して下さいました。

みこころを実現するために。わたしたちの罪を赦し、ご自分の子とし、神の国を与えて下さるために。父なる神さまは、ご自分の愛する御子イエスさまを、喜んでわたしたちに与えて下さったのです。神の国をわたしにくださるために、その尊い御子の命を、死に引き渡すことさえ、して下さいました。

「あなたがたの父は喜んで神の国を下さる。」「御国を下さることは、あなたがたの父のみこころなのである。」

この約束は、この御心は、まさに神さまがイエスさまをわたしたちに与えて下さり、イエスさまが十字架と復活の救いの御業を成し遂げて下さることによって、実現したのです。こうして御国は、わたしたちのために開かれています。神さまのご支配はイエスさまにおいて

始まっています。いつでもそれは、わたしたちに喜んで与えられるために、すでに用意されているのです。

だからイエスさまは、「小さな群れよ、恐れるな」と言われます。

小さな群れとは、イエスさまに従うゆえに、敵意のある人々と、多くの群衆に囲まれる弟子たちです。小ささのゆえに、弱さのゆえに、不安と恐れを抱き、あれこれと思い悩んでいる、このわたしたち教会の群れです。この宮崎中部教会も、なんと小さな群れ。なんと弱々しい群れでしょうか。

しかし、この「群れ」というのは、家畜の群れを表す言葉であって、必ず飼い主がいることを意味しています。わたしたちの群れの飼い主は、もちろんイエスさまです。

「恐れるな、小さな群れよ」。そう言って下さる時、イエスさまは、「恐れるな、わたしの保護の下にある、わたしの群れよ。わたしが共にいる。神の国、神の支配は、わたしと共にある。わたしが救いを実現する。父なる神があなたがたを養う。聖霊があなたがたの信仰を守る。だから、恐れるな、小さな群れよ。」そう言って下さっているのです。

この「恐れるな」との命令は、イエスさまのご支配の下にある群れが、イエスさまに守られ、養われ、生かされる中で語りかけられる、励ましの言葉、慰めの言葉、平安の言葉なのです。安心しなさい、とのご命令なのです。

わたしたちには確かに、多くの思い悩み、多くの恐れがあります。しかし、わたしたちを召し集め、支配し、導いて下さる飼い主イエスさまが、前から、後ろからも、この群れを囲み、いつも御手を上に置いていて下さいます。

わたしたちは、小さい、力のない群れだからこそ、今ここに立ち続けているのはイエスさまの御力によるのだと、より確かに信じ、告白できるのではないかと思います。弱い、小さいわたしだからこそ、わたしの信仰は神さまの強さにこそあり、神さまによって支えられているのだと、告白できるのではないかと思います。

わたしたちはこの神のご支配をこそ、心の拠り所とし、神さまの支えを、神さまとの親しい交わりを、いつも祈り求めていきたいのです。

<富を天に積む>

さて、33節以下は、そのように、神さまの恵みの内に生きる群れが、わたしたちが、もはや世の富、自分の持ち物から自由にされた生き方が出来ることを教えています。

「自分の持ち物を売り払って施しなさい」というのは、自分の物を今すぐ全部売って施さなければならないとか、神さまに頼っていることを証明するために自分の持ち物を手放さなければならない、という意味ではありません。

自分を養って下さり、必要なすべてを与えて下さるのが、神さまであることを知るならば、イエスさまという飼い主に、しっかりと守られ、養われ、安心していられることを知るならば、わたしたちは、それこそ安心して、自分の持っているものを、神さまの喜ばれることの

ために、自由に使うことが出来るのです。自分だけのために蓄えたり、自分の安心のために倉にしまうのではなく、そういう「食欲」から解放されて、神さまの喜びのために用いることを、わたしたちもまた喜びとすることが出来るのです。与えられたものを隣人と分かち合い、貧しい人を助け、神さまの御業のために用いることを、選ぶことが出来るのです。

神さまが、わたしたちのために、最も尊いイエスさまの命を与えることさえ、喜んで御心として下さったように。わたしたちもまた、その大きな恵みに応えて、神さまが喜んで下さることを選び取り、神さまの御心を自分の心として、共に歩ませていただくことが出来るのです。神さまの喜びを求めること。それが、富を天に積むことです。

<心のあるところ>

最後の 34 節には「あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。」とあります。

これは最後に、あなたがたの宝は何か、最も大切なものは何か、と問われているのです。自分が大切にしていることに、わたしたちはいつも心を寄せるものです。いつもそのことを気かけ、そのことを思っています。そして、いつしか心は、そのことへの思いで一杯になっていきます。

そんなわたしたちに、イエスさまは、「神の国を求めなさい」「富を天に積みなさい」と言われます。つまり、宝に思いを寄せる心を、天の父なる神さまにこそ向けるのです。天の父なる神さまを、心の中の一番大切なものにするのです。わたしの一番の関心事とするのです。神さまのことをいつも思い、神さまの喜びを求め、いつも神さまのことを思って歩むのです。

「あなたがたの宝のある所には、心もあるからである。」

神さまは、わたしたちを宝とし、わたしたちを一番の関心事とし、いつも心を傾けて下さっています。神さまの心は、いつもわたしたちと共にあります。だから、わたしたちもまた、神さまに心を向けて、神さまのもとに心を置いて、神さまと共に歩んでいきたいのです。

<祈ること>

「思い悩むな。」「ただ、神の国を求めなさい。」「小さな群れよ、恐れるな。」

わたしたちは、大きな恵みと、確かな約束に基づいたこのご命令に、安心して、喜んで、従っていきたいのです。

「神の国を求める」ことの具体的なことは、まず祈ることです。求めるとは、祈ることです。11 章 1 節以下で、イエスさまは弟子たちに「主の祈り」を教えられた後、9 節でこのように言うておられました。「そこで、わたしは言うておく。求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。」

求める。探す。門をたたく。これらはすべて、祈りを表す言葉です。そして、そうすれば、与えられる。そうすれば、見つかる。そうすれば、開かれる。ここにもまた、確かな約束が与えられていました。

「神の国を求めなさい。」わたしたちは、祈ることから始めましょう。そして今日一日が、神さまを思う心で満たされる一日、神さまの喜びを求める一日でありたいのです。

「父よ、御名があがめられますように。御国が来ますように。」

【お祈り】

天の父なる神さま。

あなたは、どんなに小さなものも、愛し、慈しみ、養って下さるお方です。

あなたは、その恵みに満ちた眼差しを、いつもわたしたちに向けて下さり、わたしたちに心を寄せ、愛する御子の命さえ喜んで与えて下さるほどに、わたしたちが神の国に生きることを望み、またそれを良しとして下さいました。心から感謝いたします。

あなたの、この深い恵みに囲まれているゆえに、イエスさまが飼い主であられるゆえに、わたしたちは思い悩むことがないということを、悟らせて下さい。安心して、わたしを御手に委ねさせて下さい。そして与えられた全てのものを、自分自身も含めて、あなたの喜びのために用いる者とならせて下さい。

そしてただ、あなたの恵みのご支配を、あなたと共にあることを、祈り求める者とならせて下さい。

朝起きる時も、夜眠る時も、わたしたちの心が、いつも、あなたにありますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン